

Interview

国士館大学男子新体操部

“スポーツ環境を男女平等に”を旗印に活動してきた私たちWSFジャパン。今回は視点のベクトルを少し変え、“五輪の華”とも称される女子新体操に比べ、影の薄い感のある男子新体操にスポットをあててみました。

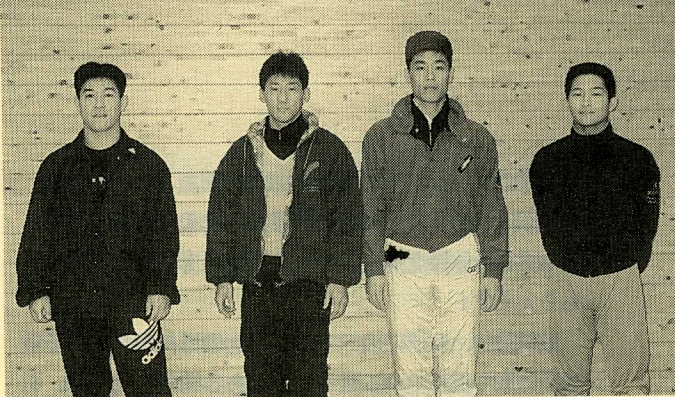
男子新体操をよくご存じない方も多いと思うので、まず簡単に説明しておきましょう。「個人」と「団体」の種目があり、「個人」は手具が“こん棒”“なわ”“輪”“棒”の4種類。“こん棒”と“なわ”は女子と同じで、“輪”は女子の“輪”より直径が2回りほど小さく、それを2つ用います。“棒”は男子だけの種目で、女子にある“リボン”と“ボール”はありません。12m四方のマットで演技を行い、時間は1分30秒です。

「団体」は13m四方のマットの中で、6人が音楽に合わせて手具は用いずに行います。演技時間は3分間です。

男子新体操が行われているのは世界で日本だけなのですが、これはなぜなのでしょう。

男子新体操の歴史は意外に古く、1946年の国民体育大会で初めて開催されました。当時は、“団体徒手体操”という名称でした。だんだん手具が用いられるようになり、「一般体操」「団体体操」という名称も使われるようになりました。これは日本独自の競技で、むしろ女子より男子のほうが先んじていたといえます。しかし67年、世界に目を向けると、女子には日本の「団体体操」にとてもよく似た“Modern Gymnastics”が存在していました。これには「個人体操」もあり「団体体操」の名称では不都合になったため、「新体操」という言葉を用いるようになりました。日本体操協会内に新体操委員会が設けられたのを機に、男子のほうも「一般体操」から「新体操」と名称が変更され、現在に至っているわけです。（現在の英文名はRhythmic Sports Gymnastics）つまり、日本では男女の新体操のルーツは同じところにあったものが、女子だけ世界に歩調を合わせることになり、今度は逆に男子が女子新体操の影響を受けるようになったということなのです。

前置きが長くなりましたが、今回は、全日本選手権大



▲左が野呂和希君、藤崎孝治君、松岡孝君、入倉修君
会（団体体操の部）で11年連続29回優勝、全日本学生選手権大会（団体体操の部）でも7年連続27回優勝、また個人の部でも連続優勝という輝かしい戦績を誇る国士館大学男子新体操部を訪ねてみました。30年近く、新体操部を指導されている福井利勝先生と男子部員4人にお話を伺いました。

新体操を始めたきっかけ

— 新体操を始められたきっかけを聞かせてください。

入倉修君（2年・個人）「中学のときは器械体操でしたが、先生に勧められて高校から新体操を始めました」

野呂和希君（3年・団体）「ぼくは、中学に入る前に新体操の監督と出会い、勧められて始めました。ジャッキー・チェンが好きだったのでバック転ができたらかっこいいな、ぐらいいの気持ちです」

松岡孝君（3年・団体）「ぼくも器械体操をしていて、中3のときにスカウトされて始めました」

— 器械体操から転向されるケースが多いようですね。器械体操と新体操はどう違うのですか。

野呂「器械体操は置いてある“器具”を用いますが、新体操は“手具”を扱うところが根本的に違います。器械体操より表現力が要求されます。また団体は6人の調和と、音楽との調和が必要です」

福井先生「器械体操は器具に体を合わせるのに対し、新体操ではあくまでも中心は体で、手具との一体感が大切なのです」

— 失礼ですが、男子新体操は女子に比べあまりポピュラーではないと思うのですが、周囲の方たちの反応はどうでしたか。

藤崎孝治君（3年・個人）「えっ、あのリボンをするの？と聞かれたことがあります」

野呂「初めはいちいち説明しなければならないのがイヤで、ただ『体操』をやっていると言っていた時期もあ

ります」

松岡「やはり女子種目と間違われたことがあります。でも男子新体操を知っている人には、すごいねと言ってもらえます」

取材前は、女子に比べてスポットの当たらない男子新体操に取り組んでいる選手たちはある種の“屈辱感、引けめ”を大いに感じているのではないだろうかと思っていました。しかし練習中の彼らを一目見たときに、それがこちらの勝手な“偏見”であることがわかりました。彼ら自身には当然のことながら、“新体操は女子の競技だ”という認識がありません。なぜなら彼らの多くが器械体操からスタートしていることと、男子新体操を実際に見てそのすばらしさを納得しているからです。また二つ目に、国士舘大学の新体操部は男子36人に比べ女子は10人しかおらず、実績からいってもはるかに“男子優位”であることも一因と思われまます。

— 女子選手はかなり厳しいダイエットをしているようですが、男子も同じなのでしょうか。

福井先生「体形を保つことはたしかに必要です。でも練習が厳しいと体重は自然に落ちるようです。ふだんは授業の後、4時から7時までの練習ですが、試合前には12時までやることもあります。精神的なものもあるでしょうが、試合前になると4kgも減る選手もいます」

— 男子ならではの、というセールスポイントをあげただけですか。

藤崎「何と言ってもタンブリング（宙返り等の連続技）です。それも手具を扱いながらなので大変なんです。跳躍力と柔軟性の両方が要求されます」

“人間性”こそが技のこやしに

— 新体操をしていて面白いこと、また反対に辛いことは？

入倉「チームにライバルが多いのと、新しい技を開発するのが大変です。面白いのは、努力が報われて試合でいい成績がとれたとき」

野呂「練習がつらいです。左足首などは慢性の捻挫で、だましだまし練習しています。好きなのはタンブリング。試合で拍手をもらおうとゾクゾクします」

松岡「組運動のときにマットがあまりよくなくて手から落ちたり、頭から落ちて脳震とうになったことがあります

ます。恐怖心との闘いですね。面白い点は、試合の緊張感でしょうか。緊張して逆に体が軽く感じてよく動いて、いい結果が出ることもあるんです」

福井先生「団体は特にケガが多いんです。お互いの信頼関係がとても大切で、ふだんからそれを築き上げていかなければなりません。ま、飲み会はしょっちゅうやっているようですから。（笑）

チャンピオンになるためには、“人にならぬ自分なりの技”が絶対に必要です。技のマスターには、1年でできることもあれば、2～3年かかることもあります。学年の変わる時が発想も転換できてチャンスといえるでしょう。大事なものは、ふだんからどれだけ新体操のことを突き詰めて考える時間を持っているか、ということかもしれません。常に自分に厳しくし、自分の感性を磨く努力をすることです。結局は“人間性”が技のこやしになるのです」（一同、大きくなずいていました）

— みなさんが練習で心がけていることは？

松岡「まずケガをしないようにということと、いつももっと上をめざして集中して練習しています」

野呂「3年生になってからは、後輩をどうまとめるかということにも気を遣っています」

入倉「常に新しい技のことを考えています」

藤崎「自分の形をつかみたいですね。高校のときは“教わって”やっていましたが、いまは“自分”しかないので、自分に妥協しないようにと思っています」

▼『世界体操祭』に向けての練習



— みなさんの考える“男らしさ”“女らしさ”とはどんなものなのでしょうか。

（ここで福井先生は、「ふだんみんなが何を考えているかがわかって、いい質問だ」とニヤリとされた。）

入倉「女らしさはやさしく温かなイメージ。男らしさ

はカッコよく、鋭く、でもやさしい、かな」

松岡「男性はレスリングや柔道に代表されるように、強い感じ。女性はシンクロナイズドスイミングやフィギュアスケートに代表される華麗、きれい、美しさ」

藤崎「新体操でいえば女性は柔らかく男性は力強い」

福井先生「新体操で“男らしさ”を追求し過ぎると、ゴツゴツしたものになってしまうんです。男性にも柔らかさは必要で、“しなやかさ”の中に強さがあるというのがいいでしょうね。究極は、角がなく滑らかな“丸い輪”ということになるのでしょうか」

— 今後の予定は？

福井先生「年間の大きな大会は、春の東日本学生選手権、夏の全日本学生選手権、秋の全日本選手権、冬の新人大会の4つです。いまは7月末の全日本学生選手権を目指して練習中です。

それとその大会の前に、ドイツのベルリンで『世界体操祭』が開催され、ここで演技を行います。これは国際体操連盟の主催で行われる発表会のようなもので、参加者は約2万人です。日本からは12団体 350人が参加することになっています。この世界体操祭は、20年前に国土館大学が初めて参加して評価を受けた場なんです」

— みなさんの今後の抱負・目標をお願いします。

藤崎「自分の演技をすることです」

入倉「今をしっかりと過ごしたいです」

松岡「全日本での優勝です」

野呂「出る大会に勝つことです。その年のみんなのイメージに残るような演技をしたいと思っています。卒業後は、指導者になりたいですね」

世界選手権開催が最大の目標

ここで、福井利勝先生の経歴をご紹介します。

国土館大学体育学部教授。1944年3月生まれの51歳。

鳥取県出身。鳥取県立智頭農林高等学校から新体操（当時の名称は団体徒手体操）を始め、国土館大学に入学。卒業後は教鞭をとる傍ら、ずっと新体操部の指導をされている。

— 現在の男子新体操人口はどのくらいですか。

福井先生「新体操は男女とも高校が中心です。男子は、中学校20チーム 200人、高校60チーム 700人、大学7チーム100人で合計約1,000人です」

— 今後、国内で普及させていくために、どのようなことを考えていらっしゃいますか。

福井先生「私は日本体操協会の新体操委員会の副委員長をしており、普及活動に努める立場にあります。男子新体操の普及のためには、まずジュニアを育成しなければなりません。中学生の新体操人口を増やしたいのですが、中学校はいま各ブロック大会しかないので、全国大会をできるようにしたいと思っています。しかし学校体育では限界があるので、体操クラブの登録人口を増やしたいとも考えています。ネックは、指導者の不足です。競技経験のある学生が指導者になればよいのですが、いま教員になるのは非常に難しいのが悩みです。その他、ルールの簡素化も考えています」

— 海外への普及に関しては、いかがでしょう

福井先生「最大の目標は、世界選手権の開催です。そのために、海外に積極的に新体操のPRをしていきたいと思っています。アジア諸国を中心に招待しながら新体操のすばらしさを知ってもらえるように努力しています。またそれと併せて、少しずつですが、デンマークなど海外に指導者を派遣することもしています」



野呂君の「いまは新体操をやっていることを“誇り”に思っています」という一言がとても印象的でした。まさにこの言葉が、彼らの気持ちを代弁しているといえるでしょう。彼らなりに“自分たちの力で男子新体操を広めていくんだ”という前向きの姿勢が感じられました。私もこの取材を通して、いままで全く見たことのない男子新体操の一端に触れることができ、とてもうれしく爽やかな気持ちになりました。今後、男子新体操がもっともっと普及していくことを願っています。

（6月16日取材・聞き手/WSFジャパン・スタッフライター 山本尚子、写真撮影/高橋昭子）

